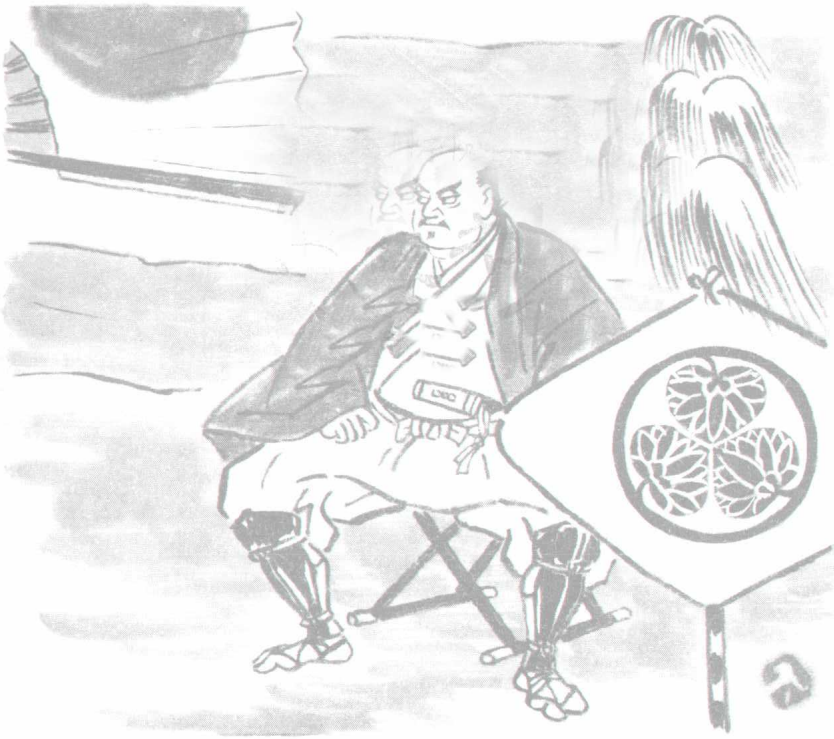
山岡荘八

徳川家康

関ケ原の巻

関ケ原の巻

山岡荘八



講談社

徳川家康(18)
関ヶ原の巻

昭和37年7月5日　第1刷発行　　¥ 320
昭和40年6月15日　第29刷発行

著者　山岡荘八（やまおかそうはち）

東京都文京区音羽町3—19
発行者　野間省一

東京都文京区大塚坂下町114
印刷所　豊国印刷株式会社

発行所　東京都文京区音羽町 3—19
振替 東京 3930
電話 (942) 大代表 1111
株式会社 講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。（和田製本）
© Sôhachi Yamaoka 1962

目

次

静かなること……七
戦端開かる……二六
見えぬ采配……四八
松尾山の眼……六九
石田草……八五
東軍進発……一〇三
火蓋切らる……一一七
戦の皮肉……一三三
勝敗の鍵……一四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

老虎若豹……一六六
勝者の陣……一八二
敗者の点晴……二〇三
虜囚の駕籠……二三一
新しき地図……二五二
女の意地……二七七
淀君日記……二九八
預かる者……三一九
政略婚略……三三五

装幀　杉本健吉
扉絵　木下二介

徳川家康

関ケ原の巻

静かなること

一

家康は八月四日に小山を発つて江戸へ入ると、そのまま暫く城内に腰を据えた。

小山を出発する時になつて、

「――そちも秀康に付いていてくれ」

鳥居新太郎忠政に、軽くいつて残して来たので、人々は蒲生秀行や小笠原秀政だけでは心もとない、それで残して来たものと思つていた。

ところが江戸についた翌々日、八月七日の夕刻になつて、それが何のためであつたかはじめてハッキリとのみ込めた。

その時家康は料理の間で、鶴を煮ながら、本多正信と、板坂卜斎、全阿弥などのお伽衆相手に閑談していたのだが、そこへ八月一日に伏見は落城し、鳥居元忠は壮烈な戦死をとげたという知らせが届いた。

詳細をきわめたその手紙は、茶屋四郎次郎と本阿弥光悦の双方からだつた。

家康は自から封を開いてそれを読むと、小さく何度もうなずいて、

「新太郎は殺さぬぞ。安心してくれ」

「何となされたのでござりまする？」

手紙の内容を知らない本多正信が問い返すと、

「この一日に、伏見は落ちていたぞ」

ポツンといつて、あわてて席を立つていつた。

眼のふちがまつ赤になり、いまにもこぼれそうに涙が盛り上がつていた。人々は顔を見合つてうなずきあつた。

鳥居元忠が討死したのに違いない。それで、その子の新太郎忠政は殺さぬぞと……

「すると上様は、会津方面では、大した戦はないとご覧なされておわすので」

と、卜斎がいつた。

「そうかも知れぬ。新太郎は殺さぬぞと、たしかに漏らされたからの」

正信は、これも暗然とした面持で、

「有難いお心じや。何よりの供養であろう」

そう呟いて、それなりしばらく黙りこんだ。

元忠と家康の、主従というより兄弟のような幼いおりからの結ぼれは、正信にもよくわかつているからだつた。

「それではいよ〳〵上様も西へご進発なされまするなあ」

「そうでござりましようとも。伏見が落ちては拋つてはおけますまい。大事な堰を切られたのでござりまするゆえ」

卜斎と全阿弥だけではなく、本多正信もそう思つた。家康の胸中で当然悲しみがはげしい怒りに変つてゆくと判断したからだつた。

すでに小山を先発した豊家の旧臣たちは、駿河を過ぎて、遠江から東三河へかゝつている頃であろう。

(伏見が落ちたのでは一刻の猶予もなさるまい！)

敵もまた勢いに乗じて近江から美濃に進出して来るのは知れきつていたし、徳川家の家中でも諸将に続いて、本多忠勝と井伊直政はすでに西上している。

この両人は両軍衝突となれば当然軍監の任務を果たすことになるのである。

(到頭これで眉に火が点いたぞ！)

側近の者の予想は一つになつた。

ところが、間もなく涙を納めて料理の間に戻つて来た家康は、西上のことには一言もふれなかつた。いや、その日だけではない。味方の諸将が清洲の福島正則の城に着いたという知らせが届いても、岐阜の織田秀信が敵方に呼応したと知つても、一向に腰をあげようとしなかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

清洲城から何度か西上を促して使いがやつて来た。しかし家康はいぜんとして動かない。

そうなると側近の間でもいろ〳〵と家康の心事を憶測する者が出はじめた。

何れ深い思案があつてのこと……とは信じながら、わざ〳〵敵に時を稼がすことの不利が、次第にみんなをいら立たせてくるからだつた。

「――やはり上様は、石治少の武力よりも、上杉の武力を重く見てござるのじや」

「――そうかも知れぬ。実はの、小山までおいでの時に、采配をお忘れなされ、とある竹藪のわきをご通行のおり、細竹一本切らせて采配をお作りなされた」

「――それとこんどの事とかゝわりあるのか」

「――いや、あとを聞け。そして小山にある間は、その細竹の采配をお持ちなされていたが、帰途またその藪のそばをお通りなされた節、思い出されて、その采配をお捨てなされた。石治少と戦うのに、采配などはいらぬと仰せられてな」

「――ほう、采配などいらぬと仰せられたか。では、やつぱり上杉を重く見て、その出方を見定めようとしておわすのじや」

「――おれはそうは思わぬ。上杉勢は守どの（秀康）に睨まれて動く気配はないではないか。守どのはあのご気性ゆえ、上杉景勝に堂々と正面から手紙をやられたそうな。お許も謙信以来の家柄を誇る武将ながら、われ等もまた、家康が子にして、太閤に養われ、いさゝか誇りを持つものなり、何時にても遠慮なく仕掛けられたい。若年ながら秀康、何時たりともお相手仕ろうと……それに対して景勝からも返書があつたと聞く。上杉景勝は、ご尊父の留守を狙つて戦を仕掛けるような卑怯者ではないと……それゆえ上杉を警戒しているのではなく、これは北国から九州のはずれま

で、あらゆる人々の動きを見きわめ、叩くべきものは一挙にこれを叩く気であろうぞ」

「――いや〳〵、それもものの一面ながら、すべてではない。上様は凡人には測り知れない遠大な神謀のお方じや。伏見を落とされて凡人ならば必ず怒る。怒つて出てゆくと却つて敵の結束を固くする。石治少は烏合の勢ゆえ、怒る時に怒らなんだら、拍子抜けして逆に疑心暗鬼のとりこになる。つまり敵の結束のゆるみを待つておわすのじや」

「――しかし、そのために、清洲の城にある味方の諸将が気抜けしたら何とするのだ。みな〳〵軍費に困つて、短気な福島どのなど、何故ご出馬なされぬかと、怒りだしているそうな。やはりこゝは出てゆくべきじや。ものには汐時ということがある」

諸説は一応家康を信じながらも、心では西下を急いでいるのは否めなかつた。

こうしてついに八月も半ばとなつた。しかし家康は、いぜん腰をあげようとせず、却つて逆に風邪気味で当分西上出来なそうだといいだした。

むろん、考え無くていい出したことではない。

はじめは家康も、江戸に一、二泊して、すぐさま出馬する気であつた。すでに東国の手配にも、足もとの固めにも手落ちはない。それが小山からの帰途、ふつと一つの反省にぶつかつて、

（これは急くまいぞ！）

自分で自分をもう一度きびしく見詰め直す気になつたのだ……

三

それは側近の人々の話題になつている、小山からの帰途、手作りの采配を捨てたおりのことだつた。

場所はたしか栗橋の近くの、路傍の竹藪であつた。小山へ赴くおりに、采配を忘れて来ていたこ

とに気付き、采配も持たぬといつては士気にかゝわる……ふと頭に泛んだまゝその藪から小竹を切らせ、自分で紙を細く切つて作つたものだ。その形ばかりの采配が、帰途もまだ自分の掌中に握られてあつたのを見ると、

（これでよいのだろうか？）

家康はひやりと自分を振返る気になつた。

采配が不安だと思つたのではない。今度の騒動に対する自分の態度が、私情私憤による汚れた野心の采配ではなかつたかと反省したのである。

私情や野心の采配だつたら、それは多くの「無理――」を含む。無理は一時の小康はもたらし得ても、何時かは崩れ去るものだつた。

覇業の中途で倒れた信長の無理。

大陸遠征を企てて、それが死期を早める結果になつた秀吉の無理……

いままた家康の思案の奥に彼等と同じ無理はないであろうか？　そう思つた瞬間に、家康は手作りの采配をぽいと以前の藪に返したのだつた。

それを誰かが、何うして捨てるのかといぶかつたゆえ、

「――石治少に向うに采配は不要」

と答えたのだ。いい変えれば、戦場の指揮だけで天下の泰平は招来出来るものではない。実際に人々を心服させ得るだけの「徳――」と、自然の意志に叶う真理が背後に必要なのだという意味だつた。

こうして采配を捨てた時から家康の心は一段とひらけて来た。

小山にあつた折りも、善悪一切の情報はこれを諸将にかくさなかつた。

秀頼の名ですする戦ゆえ、義理を感ずる人々は三成に味方されたい……と、そこまで虚心に告げて来た。

しかし、諸将がまだ家康を恐れているのは、その実力であり、過去の戦歴であつた。

したがつて、家康が、彼等に続いて西上し、もし陣頭に立つて采配を振つたとすれば、彼等は否応なしに戦わせられる結果となる。否応なしに戦わせられたあとに何が残るかは、第二の朝鮮出兵で、家康が痛いほどハッキリと知らされて来ていることであつた。

今度の騒動も、実はその第二の出兵の「無理――」が原因で引起されたものといつてもよい。

戦う者同志の間に不和が生じ、更に、文治派と武断派の憎悪はこれで救いがたいものになつた。

その上、戦功の報告、論功行賞への不満がからんで、太閤の生涯の功を一挙にみにくい派閥争いの泥沼へ引きおろしてしまつたのだ……

（采配は、持たぬがよい……）

いや、この場合の「采配の持主――」は、家康個人ではなくて、どこまでも泰平を築こうとする万人の意志であり、歴史の流れの方向でなければならないと反省したのだ。

仮りに家康がこゝで不慮の病いに倒れたとしても、それはそれなりに時代の「力――」となり得るもの……それが実は眼に見えぬ采配をつねに振りつゞけていたのだと悟つたのだ。

家康が、その反省に従つて、敢えて出陣を急がず、清洲へ使者を出したのは八月十五日、使者には村越茂助直吉が選ばれた。

四

「清洲からの催促がしきりゆえ、村越を使いに出そう。呼んで呉れ」

そういわれた時に、本多正信も、その子の正純も顔を見合わせた。

催促しきりというよりも、すでに福島正則などは怒気を見せているという内報が届いている。

「――内府は、いまさらになつて臆病風に吹かれておわすのか。さりとは情無いお方じや」

その筈だつた。清洲を中心にして結集している

諸将は、福島正則と池田輝政を先鋒にして、黒田長政、細川忠興、中村一栄、浅野幸長、堀尾忠氏、京極高知、加藤嘉明、田中吉政、筒井定次、藤堂高虎、山内一豊、金森長近、一柳直盛、徳山寿昌、九鬼守隆、有馬則頼、同豊氏、水野勝成、生駒一生、寺沢広高、西尾輝教などのほかに、徳川家の本多忠勝、井伊直政が軍監格で加わって、家康の到着を今か今かと待ちかねているのだから……

（そうした状況の中へ使者として、人もあろうに、村越茂助直吉とは……？）

それが父子のおどろきだったのだ。

正信は、家康が出発をのばしている原因を、彼は彼なりに解釈していた。

用心深いうえにも用心深い家康はこゝでじっと前田利長や、毛利一族の吉川広家、肥後の加藤清正などの動向を見きわめようとしているのだと考えていた。

事実、江戸へ着いてから家康は、それ等の人々に、それ〴〵手紙を寄せたり、連絡をとったりはしているのだが……

しかし、清洲への使者に村越茂助となると、正信の判断力の埒外へ大きくそれる人選だった。

村越は無筆無学というよりも、他人の前へ出て、満足に口の利ける男ではなかった。外交などには凡そ不向きな、頑固な愚直者で、もし敢えて美点を探せば律義さでもあろうか。この相手に喰いつけと命令されたら、ほんとうに嚙みついて死んでも離さぬ男……いやそれは人違いだといったところで、いったん嚙みついたら何うにもなるまいと思われるような男であった。

したがって、清洲へこゝで使者を送るとすれば、自分か、それとも倅の正純か、永井直勝では少し荷が……そう思っていたところだけに訊き返さずにはいられなかった。

「あの、村越茂助を清洲へ遣わされまするの

で……？」

「そうだ。こうした使者にはあれが向こう。呼んで参れ」

それから板坂卜斎を手招いて、先ず手紙を認めさせた。

本多正純は、父が村越を呼びに行つている間、（はゝあ、すべては手紙の中へ認めて、口上の要はないものとなさるお心か……）

そう判断してホッとした。

口を利かせぬ気ならば、無口な村越は適任者に違いない。才気走つて余計なことなどいおうとしてもいい得ない男なのだ。

ところが卜斎が筆硯（ひっけん）を構えて家康の口述を求めると、家康の口上はたつた五行で終わつた。

「其許の模様知りたく仕りて、村越茂助を以つて申候。御談合候て、仰せ越さるべく候。出馬の儀は油断これなく候。御心易かるべく、委細口上申候」

「これで終りでござりまするか!?」

思わず正純は、眼を丸くして家康に向き直つた。

五

「委細は口上で申し候。手紙はそれだけでよかろう」

家康が、そう答えて、宛名は、先手の福島正則と池田輝政の陣中とし、署名をして封をするよう卜斎に返したところへ、本多正信は村越茂助を伴つて戻つて来た。

「村越か」

「は……は……はいッ」

村越茂助は緊張してどもつた。或いは本多正信に、あまり難しい使者であつたらお断わりするようにとでもいわれて来たのかも知れない。

「そち、ご苦労ながら清洲まで参つて呉れ。そちで無ければならぬ使者じゃ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com